

# Chapter 1

震災を振り返って

## 知事 インタビュー



## 震災を振り返って

# インタビュー； 片山善博鳥取県知事

あの地震から6年。  
被災地復興のために、過去に前例のない住宅再建  
支援に挑戦した片山知事に、改めて当時の状況を  
振り返ってもらった。

今でもよく覚えています。地震が発生した時はこの知事室でお客さんと話をしていたんですね。そしたらグラッときて。私はそのとき「これは県西部で起きたのだろうな」と感じたんです。2ヶ月半くらい前に県西部で防災訓練をした時の状況設定というのが、鳥根県と鳥取県の県境付近を震源とした震度6強、M7.2の地震で、そのことが頭にあって、そういう風に思ったんでしょうね。たまたま当たってたんですけど。

実はそのときに1時半から行事を予定していたんです。その行事というのは、県建設業協会と県との間で「災害時の応援協定」の調印式だったんですね。集まっている協会の皆さんには「こんなことになっちゃったんで調印は後になりますけれど、今回の地震からは是非応援の実をあげてください」とお願いをして、すぐに災害対策本部に行ったんです。

それで直ちにヘリコプターを被災地一円に飛ばして、まず火事がないかどうかを確認しました。幸い火事はありませんでしたが、ヘリコプターから送られてくる映像からは、いろんな所で土砂崩壊とか道路閉塞とか落石とか家屋倒壊とか屋根が飛んでるとか、そういうのが昼間ですから非常によく見えました。「これは大変な地震だ、相当死者が出たんじゃないか」と思いましたね。

私は「ひょっとしたら地震があるかもしれない」とは思っていました。だけど頭の相当な部分では、「起こるはずがないだろう」とも思ってたんですね。その時は正直言って「いたいどうなることだろう」と思いました。でもこれまでいろんな準備をしてきたり、訓練をしてきたりしたわけですから、「自信を持って、この度の地震に対しても災害復旧に努めましょう」ということを申し合わせて、それから作業にあたったんですね。

### 「自信を持っておやりなさい」

印象的だったのは、当時の森総理大臣から非常に早い段階で電話がかかってきたんです。「片山さん、とにかく必要なことは全部やりなさい、後でちゃんと政府が面倒みるから」と言ってくれて、すごく嬉しかったという心強かったですね。県の災害対策本部は、私が本部長でトップですから、誰も頼りになる人はいないんです。そういう時に総理大臣から「自

信を持っておやりなさい、後で政府がちゃんとサポートするから」と言われてすごく心強かったですね。

私もすぐに被災地の市町村長に「総理大臣からこんな話があったから、大変だろうけどお互い一生懸命頑張ろうね」と電話をしたんです。そうしたら今度は、市町村長さんからも喜ばれたんですよ。現場で「はてさてこれからどうしようか」と思って心配している時に、知事から電話をもらってやる気が出てきたとか、自信を持ってやることができたといったことを後で聞きました。

### 地震対策はすでに始まっていた

知事に就任後、万一の地震に備えて準備をしていたんですね。まず防災計画の点検をしました。すると不備がいっぱいあったんです。現場で機能しないような計画だったんですね。私も各部長も自分の問題としてこれらの点検をしていたので、計画の問題点を自分たちでちゃんと分かっていたんです。

例えば、避難所に送る食糧というのは、県が食糧事務所から精米を確保して被災地に送るんです。そんな非現実的でしょ。電気もガスもないときに硬い米をかじるわけにもいかないし。それは計画を見直し、弁当業界と協定を結んで、いざというときには優先的に被災地に弁当を供給してもらうとか、そういう見直しがあったんですね。

それから自衛隊や関係機関との連携を密にしようと、それまでやっていなかった関係機関との会議をしたんです。私などが参加するトップの会議や実務者レベルの会議をして連携を深めたんですね。だから、主な人同士はみんなが顔見知りになってたんです。

西部地震の時には、自衛隊の地方連絡部長さんがすぐに災害対策本部に駆けつけてくれて、部長さんを通じて自衛隊への出動要請などをしたんです。

実はそのときに、米子の陸上自衛隊第八普通科連隊の皆さんは、ほとんど演習で県外に出ていたんです。県内に残っていた人はごく僅かで、そういうことも全部聞くことができました。「今、必要最小限の範囲内で出動してください」とか、「ぜひ早めに演習地から帰ってきてください」というようなことも相談できました。



もっと言いますと、その部長さんは入院中だったんです。だからジャージ姿で髭をはやして、最初誰かと思ったけどよくみたら部長さんでした。病床から出てきて、大変なときに大きな働きをしてくれたんですね。これは有難かったですね。

## 防災訓練から得たもの

鳥取県西部地震の2ヶ月半くらい前にやった防災訓練は、たまたまぴったりの状況設定だったんですが、やっていてよかったと思いました。

いざという時にとりあえず何をやらないといけないかちゃんと頭に入っていましたから、初動は非常にスムーズでした。

最初に何をしていたかわからないとか、皆集まるけど呆然としてるとか、トップは下から上がってくるのを待つとか、下は上からの指示を待つとかいうことが往々にしてありうるんですけど、鳥取県西部地震の時の災害対策本部はそんなことはなくて、皆が各自やらなければならないことにさっと取りかかることができた。これは大変大きかったと思います。

## 忘れられていたこと

細かい話ですけど、災害対策本部を切り盛りする係を作ってなかったんですよ。災害対策本部ではみんな役割を決めてやってたんですけど、災害対策本部自体を切り盛りするという係を決めていませんでした。

例えばどういうことかという、夜になっても全然食べ物も飲み物も出てこないとか、皆気がついたら夜の9時になって我々何も食べていなかった、被災地に食糧を送るのは一生懸命にしてみたけど、気がついたらお茶の1杯もお弁当もここには出てこない。それなのにわかには食糧調達係を決めたりしました。外のことばかり考えていて、肝心の災害対策本部の運用のことを考えていなかった。

例えば、最初のうちは私が来客に椅子を出したりしていましたね。皆バタバタ動いていますから。そんなことも懐かしい思い出です。

## 「出て行きたくありませんけど・・・」

地震の翌朝から現地にヘリコプターで飛んだんです。毎日朝行って夕方帰ってくるという日々でした。現地に行ってみると、直後の状況、数日経った時の状況、1週間から10日くらい経った時の状況と段々ステージが変わってくるんですね。このことが非常に印象的でした。



最初は、被災直後から3日間連続して行ったんですが、その頃は被災者の皆さん結構明るいんですよ、高齢者であっても。どうしてこんな皆さん明るいのか不思議に思って話をしてみると、あんなにひどい揺れでタンスが倒れたりいろんなことがあったけども、命を失うことはなかったし、大半の人は無傷で難を逃れたんです。そのことをすごく皆喜んでいました。自分自身のことは勿論だけど、家族とか友人とか、周りの皆さん誰も命を失わなかったと。だから明るかったんです。

ところがそれからしばらく経って、今度は逆に皆沈んでいるんです。暗い顔して避難場所で皆沈痛の面持ちで、数人でひそひそ話とかしているんですよ。

どんなことを話されているのか聞いてみると、「これからどうしよう」と。皆、家は傾いたり屋根が飛んだり、中には全壊している家もあったわけです。

被災者は高齢者が多いわけです。都会に子どもが出ている家がほとんどなんです。

「お母さん、僕の所に来れば」と声をかける子どもさんが多いんですよ。すると、高齢の被災者の皆さんは心が揺れるんですね。「もうしょうがないから行こうかな」と。でも本当は皆さん行きたくないわけです。住み慣れた場所で余生を全うしようと思っていたのにね、今更大都会に行くのはやだなあと。だけど今まで自分が住んでいてこれからも住もうと思っていた家はもう住めないし、そこで非常に心が揺れるんですね。

でももうしょうがないから息子の所に行きますというような人が出てくるでしょ。そうすると周りの人も「あなたが出て行くなら私も行こうかな」「出て行きたくないな」とそういう話をするんですよ。私なんかにも「知事さん、死ぬまでここにしようと思っていましたけど、しょうがないから息子の所に行きます。行きたくありませんけど」とか言われるんです。そこで私は大体わかったんです。「ああ、この地震の復興は住宅問題が一番大きなポイントだな」と。

### 絶望を希望に変えるために

私が思う災害復興の一番のポイントは、被災した人たちの不安を、どうやって取り除いてあげるか。「住む所がない」「これからの人生どうなるんだろうか」その絶望を希望に変えることなんです。

その観点からすると、「この度の被災地の皆さんの不安を解消する、絶望を希望に変えるというのは、住宅問題を解決することだな」と分かったんです。そこで「これはもう住宅再建の支援をすることが一番大切だな」と直感しました。

「住宅再建支援しようじゃないか」「皆ここに住みたいと言っているんだから、出て行きたくないという人たちばかりなんだから、ある程度の公的支援をして、倒れた家を建て替えるとか、壊れた家を修繕するとかの後押しして、サポートすれば出ていなくてもいいのかな」ということを政策として考えようという指示したんです。

ところがしばらくしてから「駄目です」と報告がきたんです。「なんで駄目なの？」と聞いたら「そんなことはできないようなんです。住宅再建支援はやってはいけないと国が言うんです」と。「そんなことないでしょ。神戸の大震災の時に前例があるんじゃないの。兵庫県なんか聞いてみれば」と私も気楽に言ったんですけども、「いや、兵庫県に聞いても、阪神・淡路大震災の時にもやっていないそうです」と。憲法違反だとか財政法違反だとかで、個人の住宅再建に公的資金を投入してはいけないという報告だったんです。

### 現場では絶対に必要な政策だから

だけど、国に補助金をくれとか国から財源をもらってこいというわけじゃないから、「県の貯金で住宅再建支援するんだから問題はないはずだから考えよう」ということで、住宅再建支援策をまとめたんです。

ただ、政府がその時猛反対で「絶対やっちゃいけない。させない」と、ファックスが山のように届いてね。あまりにも執拗な反対だったので、地震が発生してから10日目くらいに上京しまして、政府に説明に行ったんです。だけど猛反対でした。

「政府のお金を使うことはないし、やってはいけないと政府は言うけど、どこにそんなことが書いてありますか？憲法の第何条にそんなことが書いてあるんですか？書いてないでしょ」「財政法のどこにそんなこと書いてあるんですか？住宅再建支援はしてはいけないなんて。我々も法治国家の一員だから法律には従うけれども、法律でやっちゃいけないと書いてないし、現場では絶対に必要な政策だと私は思うからやりますよ」と、半ば物別れだったけれども、一応説明をして、表現は悪いけど仁義をきって、10月17日に発表したんですよ。

### 最大のメンタルケア

さすがにその時は私も不安でした。というのは、調査が済んでいませんでしたから、一体どれだけ対象があるのか、どれくらいかかるのかわかりませんでしたから。



被災地の日野町役場で協議する日野町長（左）と知事



それから市町村からも「認定をどうやったらいいのか」「建て替える場合は簡単だが、修繕の場合に事業費はいくらかかるのか、誰が査定するのか」と、不安だという声が上がってきたんですよ。政府からは絶対駄目という横槍があったから、発表した後は、精神的にすごく疲れたのを今でも覚えています。

だけど、翌日になって被災地の皆さんにね、すごい元気が出たんですよ。「県や市町村がそれだけ応援してくれるなら自分たちも頑張ろう」と。今まで「どうやって暮らそうか」「都会の息子の所に行くの嫌だな」とか心配されていた皆さんが。

メンタルケアにあたった精神科医に「住宅再建支援策を発表したその直後から皆前向きになって、これが最大のメンタルケアだった」という話を後で聞きました。それを聞いてすごく嬉しかった。のみならず、神戸の方から応援のメールがいっぱい来たんですよ。「私たちがやってほしいと思って、県や政府にあれだけお願いしたけどできなかったことが鳥取県でできると聞いて、私たちは嬉しくなった。がんばってください」と、いっぱい電話とかメッセージが来てすごく勇気づけられましたね。

実は住宅再建支援をするというって相当金をかけましたけど、逆に省けた部分があるんですよ。普通は仮設住宅を造るんですが、仮設住宅は1戸あたり撤去費も含めて400万円かかるんです。400万かけて2年経ったらなくなるんです。しかも膨大に作るわけで、それが、鳥取県の場合は住宅再建支援をするということで、仮設住宅を沢山造らずに済んだんです。だから、普通は仮設住宅にかかる費用が住宅再建支援に回ったと考えれば、決して余分な出費ではないし、かえって私は良かったと思います。

あの地震がきっかけとなって住んでいるところを離れて都会に行ったという人は皆無に近いですね。それが一番良かったと思います。

## 今振り返って思う、たいせつなこと

特に行政機関の関係者は、自分の問題として何をしなきゃいけないのか、何をすべきかということを入れて、身に付けておかないといけない。グラッと来たときに、計画とかマニュアルをひもといているようでは駄目なんです。そんな暇なんてありませんから。そのためには、絶えず訓練すること意識を持つとか、これが一番大切なことだと思います。

それから、被災した皆さんが希望を持って、元気に復興にあたれるということが、ものすごく大きな力になるんですよ。皆さんが不安な日々をずっと送るのか、そうではなくて不安をある程度はね除け希望を持って自ら復興・生活の再建に邁進するのか、私はその分かれ道になったのが住宅再建支援だと思います。「皆さん希望どおりここに住み続けられますよ」という可能性をメッセージとして出したということが、被災者の皆さんの元気を引き出すことに繋がったのではないかなと思います。

その後、私たちが予想していたよりも断然早く地域が復興しました。それは、被災者の皆さんの力だと思います。被災者の皆さんをいかに元気にして、力を引き出すかが災害復興の一つのポイントだと思います。

地震発生に至るまでの事前対策

平成11年4月の片山知事就任以降、知事公約である「防災体制強化」に積極的に取り組んでいたところであるが、特に地震が発生する約2か月前には、県・米子市・陸上自衛隊・航空自衛隊・海上保安本部・警察・消防・中国電力の計8機関が参加した県で初めての災害図上訓練が米子市で実施された。

訓練で想定された地震の発生場所と規模は、その後発生する鳥取県西部地震とよく似ており、地震が起きる直前に実際に災害対応にあたる担当者らが、実際に使われる現地対策本部に集合し、顔を合わせていたため、それらの準備や訓練での経験が災害発生直後の初動対応に非常に有効に機能した。

- 平成11年7月 1日 防災を専ら職責とする「防災監」を新設
- 平成12年1月17日 「防災に関する関係機関との情報交換会」の開催（関係機関との連携強化等）
- 4月 1日 防災組織の強化（「消防防災課」を「危機管理室」「消防課」に組織改正）
- 5月23日 「第1回職員防災訓練」の実施
  - ※ 以後、県地域防災計画の見直し、防災マニュアル・電話帳を作成
- 6月26日 「消防防災ヘリコプター搬送訓練」の実施（米子市～鳥取市）
- 6月30日 「災害時における生活関連物資の調達に関する協定」の締結
- 7月21日 西部地方機関職員を対象とした「災害図上訓練研修」の開催
- 7月31日 「鳥取県災害図上訓練」（西部総合事務所）の実施
  - ※ 訓練想定
    - 震源・規模：鳥根県東部を震源とするマグニチュード7.2の地震
    - 各地の震度：震度6強（米子市）、震度5弱（境港市、西伯郡）
    - 被害概要：死者約1,000人、負傷者約12,000人、家屋全半壊約8,000棟
- 8月17日 「西部地区市町村消防防災主管課長会議」（米子市）の開催
- 9月 1日 「第2回職員防災訓練」（抜き打ち参集訓練）の実施
- 9月 6日 「鳥取県総合防災訓練」（鳥取市）の実施
- 10月 6日 鳥取県西部地震の発生

参考 阪神・淡路大震災を教訓としてすでに取り組んでいた防災対策

- 平成8年
  - 2月 県地域防災計画（震災対策編）の全部修正
  - 3月 地震津波緊急情報伝達・職員参集システム整備
  - 11月 震度情報ネットワークシステム整備
- 平成10年
  - 3月 ヘリコプターテレビ電送システム整備
  - 7月 消防防災ヘリコプターの運航開始

大地震想定  
300人が災害図上訓練  
行政、自衛隊、民間の8機関

災害時の情報の共有化とスムーズな連携を目的に、行政、自衛隊、民間など8機関約300人が参加し、大規模地震を想定した合同の災害図上訓練が31日、米子市統町の県西部総合事務所で行われた。これだけの幅広い関係機関の合同訓練は初めてで、全面的にも珍しいという。

参加機関は県、米子市、陸上自衛隊第8普通科連隊、航空自衛隊香取基地、第8管区海上保安本部第8航空基地、県警、県西部広域行政圏管理組合消防局、中国電力。

訓練は「午前8時5分、鳥根県東部を震源にマグニチュード7.2の地震が発生。米子市内の震度は6強、境港市、西伯郡は同6強。午前9時15分、死者約1,000人、負傷者1万2,000人、家屋の全半壊約8,000棟。ガス、電気、水道、電話がストップ」という想定。

午前9時10分、県西部総合事務所2階に防災服に身を固めた職員が集まり、関係機関の代表による合同協議会を設け、それぞれの特徴と被害状況が次々に報告された。現場からの連絡をもとに医療や医薬品、食料などの援助費の要請、被害者の行方のお知らせなど、機関では互いに話し合いの問題を協議し、話し合い役割分担を決め、それぞれの機関に指示した。

また、午前11時から図上訓練（図上）は、米子市西三郡の陸上自衛隊米子駐屯地へ、自衛隊、消防、警察が合同で被害者の搬送の救出、応急手当、搬送等の業務も行った。各機関の代表は「いざいざの場合、一貫して訓練しただけでも大きな経験



関係機関が集まって行われた災害図上訓練

があったと口を揃えて、県の防災対策は今回が初めてで、初めは不安な気持ちもあったが、発生から1時間ほど経った時点で、合同の図上訓練をもつた。

【原田 勉】